

科学技術政策担当大臣 茂木敏充 殿

総合科学技術会議有識者 殿

東京都千代田区霞ヶ関3-1-1

中央合同庁舎四号館

「大強度陽子加速器計画におけるニュートリノ実験施設に対する評価について」

高エネルギー委員会

日本における科学技術発展のためにご尽力されている各議員の方々に敬意を表します。

10月17日付で公表された「平成16年度概算要求における科学技術関係施策の優先順位付け等について（報告）」の中で、「大強度陽子加速器計画の推進（第2期計画前倒し分）」としてニュートリノ実験施設に対する評価が行われておりますが、当委員会として意見を述べさせていただきます。

当委員会は、素粒子物理学の実験研究に従事する研究者の中から選挙により選出され、我国における素粒子物理学の発展のために、研究者の意思を統一し、研究者を代表して必要な勧告及び意見の表明を行っております。

(1) 「現下の厳しい財政状況に鑑みて、基礎研究としての観点のみから多額の投資が正当化されるかについては疑問がある。」

今回の評価の中で、上記のご指摘がありますが、これは我々基礎科学の研究に携わるものとして、全く看過することはできません。

すぐに国民の役に立ち、産業に利益をもたらすような「科学技術」でなければ、国家として多額の投資に値しないものなのでしょうか。このような指摘が財政当局ではなく、科学技術を推進している当の総合科学技術会議によってなされたというところに、我々は大きな危機感を感じざるを得ません。

これまで人類の文明が大きく発展してきた根底には、必ず基礎科学における大きな発展がありました。例えば今日のエレクトロニクス・コンピューターの隆盛は、約100年前の電子という最初の素粒子の発見がなければ存在しません。100年前には電子などというものは現在のニュートリノ以上に不可思議な存在であったかと想像されます。このように真の基礎科学というのは、その結果が大きな変革をもたらすまでに何十年とかかるものであり、国家が高い視野にたって支え続けなければすぐにも途絶えてしまうものです。

かつて小泉首相が「米百俵」とおっしゃっていたように、厳しい状況下でも遠い将来を見据えて基礎的なところに投資していくことは、日本国の将来のために極めて重要なことだと考えます。総合科学技術会議におきましても、そのような視野にたって議論をしていただけますよう、よろしく願いいたします。

(2) 「大強度陽子加速器施設計画評価報告書」(平成12年8月)では、「補完できる他の施設または競合する国内類似計画が存在するものについては、当該施設の建設計画の再検討を行うことを求める」

上記報告書で指摘されている「他の既存の施設または競合する国内類似計画」とは、ニュートリノ施設のことではありません。J-PARC で計画されている T2K 実験は、高エネルギー加速器研究機構と東京大学宇宙線研究所の共同で現在進めている K2K 実験と競合するものではなく、圧倒的な測定精度でニュートリノ研究の新たな展開を図るものです。

また「第一期計画」におけるリニアックの性能低下が指摘されています。これは長期的には回復が必要となりますが、当面のニュートリノ研究の質の低下は生じません。リニアックの復元とニュートリノ施設の関連は、J-PARC からの学術的成果の観点から、その順位を決定されたものです。

当委員会では、以前より J-PARC のニュートリノ施設について全国の研究者を交えて詳しい検討を行っており、その学問的価値については研究者の間で確立しています。当委員会は急速なニュートリノ物理学の進展に鑑み、2002年6月にニュートリノビームラインの早期建設の要望を J-PARC 推進室に提出しております。ニュートリノ実験施設は建設に長期間を要し、第1期計画が終了してからの建設着手では国際競争に遅れをとることになり、我が国の優位性が維持できなくなります。事実米国フェルミ研究所では、T2K と同様の目的を持った計画が議論され始めています。

以上、ご多忙のこととは思いますが、日本の科学技術の将来がかかっておりますので、再度の検討をよろしくお願いいたします。

平成15年10月28日

高エネルギー委員長

(神戸大学・大学院自然科学研究科・教授)

野崎光昭